

Title	雜報
Author(s)	
Citation	地球 (1930), 13(5): 393-396
Issue Date	1930-05-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/183749
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

○日本地形概説

近畿中國篇 第三卷 工藤暢須著

昭和五年三月 中興館發行 定價二圓九十錢

近刊の日本地理書である、總論の外に各府縣別に詳解を試みたもの、菊版三七〇頁、地形圖に縮尺が入つてゐない(F)

○世界の地質構造

三村信男著 昭和五年三月

大同館發行 定價五圓八十錢

著者はこの春期休暇に大和アルプスを遠征し、氣候の激變に會し、あはれ有爲の志を抱いて長逝した。同行の生徒の中にも、不幸に會したものがあつた。悲痛止む能はざるの時、予はこの新著を手にして徒らに人生の洩りがたきを哭するのみである。近畿の中等教育界は、さきに大阪の山極氏を失ひ、今は三村氏を失ふ、本學園も亦これら好學の君子を失ふて寂寥の情に堪えない、本書はかくて三村氏の絶筆となつた菊版五四八頁、サラサラと世界地質を書き流したものであるが、それにしても授業の餘暇にこの才筆を揮はれたことを敬服し敢てこの書を同好の士に推薦し一は以て故人の靈を慰めたい(藤田)

雜報

○長崎縣七釜鍾乳洞

七釜鍾乳洞は西彼杵郡七釜村中浦北郷字戸五郎に屬し、中浦郷の北端から南西五町の丘陵に在り。全長四町三十五間、入口は北面し高さ六尺、幅五尺あ

り、入口より八米までは平坦にして高さ約四尺立ちて行くべきも是より先は匍匐して漸く通ず。屈曲甚だしく洞口より五十五米にして一瀑布あり、清水溜といひ高さ十米、階段狀の崖上を落下し奇觀を極む。溜を上れば更に道開け洞口より二百七米にして八疊敷位の廣間に入る。此處は白宮殿と呼ばれ高さ約二間、天井及兩壁は鍾乳石を以て蔽はれ恰も白玉の殿堂たる觀あり。更に進めば大小長短の鍾乳石及石筍簇生し甚だ變化に富む。再び入口より四百二十一米にして一瀑布あり、靈泉溜又は奥の溜と名付く、五層をなせる岩上を流下す。之より先は溪流に沿ひ行路困難なり。本洞は從來清水溜まで探勝されたれどもその奥を究めたるものなかりしが、昭和三年八月洞口より五百米の地點まで探究されたものなり。(長崎縣史蹟名勝天然記念物第六輯による)

○世界に於ける動力使用の現況

石炭は現今に於ける最も重要な動力であるが、漸次に石油と水力とが増加しつゝあることは注意すべく、ことに、船舶に於ては石油其他に於ては水力と石油の使用が擡頭して來つゝあるのが世界の趨勢である。

動力の種類と其の使用百分率

種類	一九一三年	一九二五年
石炭	九〇、〇九%	七七、一五%

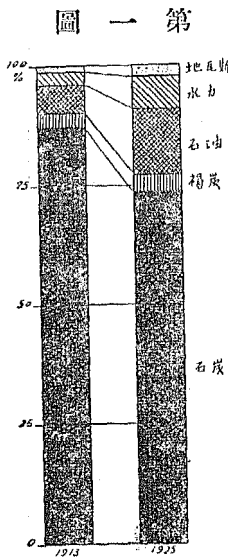
石炭油及瓦斯力	水力
七、一三	二、七八
一六、〇九	六、七六

船舶に使用せる動力の種類と其の使用百分率

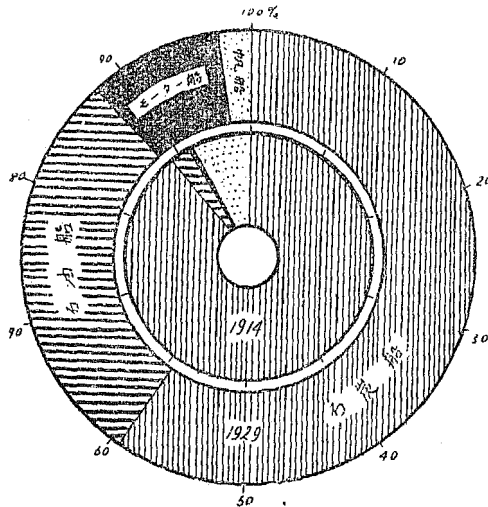
種類	一九一四年	一九二九年
石炭	八八・八四%	五九・二九%
石油	二・六五	二八・五三
帆モーター	〇・四五	九・七三
帆	八・〇六	二・四五

× モーターを使用する船舶は石油に含めてよい。

以上の動力の配布を分り易い様にグラフによつて示すと次の通りになる。柱状に示すは使用動力の種類と其の百分率で右は一九一三年、左は一九二五年である。圓を以て示すは船舶に使用せる動力の種類と其の百分率で、内圓は一九一四年、外圓は一九二九年の状況である。



圖二第



しかし、この勢で近き將來に於ては遂に石炭が使用されなくなるとは考へられぬ。それは利用し得べき動力の總量は現今に於ては石炭が最も豊富であるからである。されど石炭石油はいつかは消耗し盡くす運命にあるが水力は永續的である。次表は一九二五年の推定である。

利用し得べき動力推定量と其の百分率(全世界)

種類	單位十億噸	%
石炭	五六二・〇二	九九・七九
水力	九・九三	〇・一八
石油	一・九九	〇・〇四

以上 Dunlop: Power Resources of the World, London 1929. 及び Gluckauf, Nr. 4, 1930 に據るところ多し。世界石炭の存在推定量は一九一三年の萬國地質學會では七三九七・五五三(單位十億噸)と推定されたが其後各國の調査で稍少く見積る人が多い。(上治)

○日本の米穀

米穀の問題は日本として死活の問題である、何となれば六千二百萬に達する人口が、印度支那(人口二千萬)の二分一に過ぎない面積の上に密集し、而も山地多き島國なる關係上其耕地面積は極めて狭小で三十八萬二千平方呎の總面積中僅に六萬平方呎とし、その中米作に適するは二分一に過ぎないからである。

米作に關する諸條件に付日本と印度支那とを比較すれば自ら米穀市場の兩國の地位がわかる。

	日本内地	全印度支那	交趾支那
人口單位百萬	六二	二〇	四
面積同千平方呎	三八二	七三七・一	六四
一平方呎人口	一六三	二七	六二

水田面積(千平方呎)	三〇	五三	二〇
全面積に對する米作地の割合	七%八	七%二	三一%二
親生産高百萬キントル	一〇八	五七	二七
一ヘクタール當收穫單位キントル	三六	一〇	一三、五
人口一人當生産高單位キントル	一、七	二、八	七

前表によりてみるに其影響する事實は日本の水田面積の狭小なこと、其收穫率の高いことで、事實如何なる熱帶國といへども斯の如く高率な收穫をあげてゐない。而も日本の收穫率は最近三十年間絶えず増加を示めした、一八九七—一九〇一年頃は一ヘクタール當二・一キントルに過ぎなかつた、右の收穫率は伊太利の四十三キントル西班牙の六十三キントルには及ばないが、米國の平均二十キントルに比して迥に多い、日本米が右の如く多收穫で而も其品質の優良なる所以は種子精選と施肥に成功した結果である、人工肥料及硝石の利用は第二十世紀の初に於て日本の農業に一大革新を齎したのである、一九二六年發表されたクレマーの研究では日本米生産費の三割は肥料である、従つて日本の米作は相當の資本を要する點に於て他の極東米產國とは事情を異にしてゐる。日本も所によつては裸麥や、粟を食ふ人民もゐるけれども一般に生活向上の結果他の極東諸國よりも米の需要極めて大である、故に近年政府はその生産の増加に努力したけれども、國民全體の食糧を充たすには足らぬ、日本の人口を最低六千

百萬とみて、一人當の粗は一石(一キントル)に過ぎないのに、一人當の消費は一、一二石(約二キントル)となるからである、外に酒の原料として消費される、従て日本の現在の消費量は最低千二百萬噸と見積れる、所が生産高は幸じて千萬乃至千百萬噸に達するに過ぎない。そこで不足分二百萬噸の中朝鮮から約百八萬噸臺灣から三十六萬噸の移入を必要とするのである。我等は更に米の増收をはかつて、せめては伊太利の四十三キントルに迄到達せやうではないか。

○バルカン諸邦の烟草

バルカン諸邦は烟草によりて生活すといつてもよい位であるが、元來烟草は熱帶植物であつて、熱帶多雨の地では葉巻として用ひらるゝ大葉が出来、乾燥地では小型葉である、これを其産地によつて、オリエンタル烟草といふ。地中海沿岸東方の國々は夏乾燥し、年雨量二十時六見當であり土地も瘦せてゐるので、米國などゝ運つた烟草になつた、大葉には肥料を充分與へるけれども、小葉はなるべく肥料を與へぬがよい、自ら小葉の耕作地が自然の制限をうけて、山腹の乾燥につくられる、西紀一六〇〇年 はじめて土耳其に烟草が栽培されスミルナの山腹につくられたが、終にサムスン地方に最良の適地を發見し、トルコ烟草の名が出た、それから歐洲ダニユーア地方に移植されたのである。

今日では希國の烟草が、土耳其の産業を奪ひかけてゐる。希國が烟草に重要になつたのは、最近十年間のことで、第一

に領土が増加し、一九一三年以前九百萬キロであつた産額がマセドニヤを得て後二千七百萬キロに上つた、耕地が一倍半増加したからである、猶其上に、人口が急増加した、これはトルコとの人口交換で、避難民百五十萬の入國者である、主としてスミルナ、サムスーム地方で烟草を耕作してゐた希人はトルコを追はれた故に歸つてきてクレタ島、アツカ、ボオチアの各地で烟草栽培をやりだし、アナトリアから烟草を移入するやうに變つた。

かやうにして希國の烟草は謂はゞ土耳其の土地と産業とを移入した結果になつた、その產出物はトルコ型烟草產出の六分に上りその輸出は一九二七年五千萬キロに上つた。

希國で目下烟草に従事するもの十七萬家族に達し、四萬人が、これに従事する、故に希國の輸出千六百萬磅の中、烟草第一位をしめて一千萬磅に上つた。政府はサロニカ、ゾアロ、カウアラに烟草保護局を置いてゐる。

ユーゴスラヴィヤに於ても同様で國民の三分一即四百萬人が關係し、増加の見込が多い、南部セルヴィヤ産が優良であつて、輸出品となつてゐる、年額三千三百萬キロ、輸出額の三分一は烟草である。

ブルガリヤの烟草はまだ充分に發達しない。戦後の經濟界不良の結果である。トルコも亦バルカン諸國と同様烟草を重要輸出品としてゐるが大戦のために、マセドニヤを失つたから大なる打撃をうけてゐる。しかし輸出五千萬キロに達する。